



音楽が楽しくて

201 結成30周年の「楽屋姫」



コラーレで開かれた楽屋姫結成30周年記念コンサート。ステージ中央が岩谷さん

それは、特別な夜だった。昨年11月、アマチュアフォークグループ「楽屋姫」の結成30周年記念コンサートが黒部市のコラーレで始まろうとしていた。

楽屋姫は1995年、フォークグループ「かぐや姫」のコピーバンドとして結成。メンバーが楽屋で出会ったことが名前の由来だ。30周年コンサートツアーは県内を中心に30カ所で開催。この日は8カ月間に及ぶツアーや集大成で、ホールに並べられた200席は全て埋まっていた。

ステージ中央にリーダーの岩谷 英樹さん(60)=朝日町、向かって右にウッドベースを構える寺島 和紀さん(65)=魚津市、左にギターの彦次 戊さん(66)=高岡市=が並ぶ。岩谷さんの澄んだ歌声が響き、年配の観客が歌詞を口ずさむ。

「1ドルが360円という固定制の時代、男女の恋物語の歌がたくさん生まれたわけです」。曲間に、岩谷さんがかぐや姫が活躍した70年代を語る。「(かぐや姫の)南こうせつさんがソロになった頃にラジオの深夜放送をしていました、流れていた歌がこの歌でございました」と軽快な口調で次の曲を紹介。「22才の別れ」のイントロが流れる。

◇

79年、朝日町の漁師町。深夜、中学2年の岩谷さんはラジオを聴いていた。「南こうせつのオールナイトニッポン」。2段ベッドの下で寝息を立てる弟を起こさないよう、イヤホンを耳に当てる。南さんが自身の兄のことを歌った曲「幼い日に」が流れた。歌詞の情景と、自分の弟や妹との思い出が重なった。以来、かぐや姫に心酔し、レコードを擦り切れるほど聴いた。

ギターを始めたのは、高校1年の頃。通っていた泊高校の文化祭で、3年生の2人組が「チャゲ&飛鳥」の曲を弾き語りしていた。自分も弾きたいと思い、その日のうちに友達の家にアコースティックギターを借りに行った。見よう見まねで弾き始め、家業の商店で店番をしながら練習した。音楽をしていることは近所で知られ、地元のイベントで演奏するようになる。

信用金庫に就職して5年がたった頃だった。魚津駅前のライブハウスに行くと、ステージで松谷 康晴さん(魚津市)がソロでギターを弾いていた。客席にいた岩谷さんは、その演奏技術に圧倒された。ライブ後、カウンターに座る松谷さんに話しかけ、

自分も音楽をしていることを伝えた。

松谷さんは、岩谷さんの2歳年上。底抜けに明るい人だった。「何ならできる?」と聞かれたので、「『神田川』なら歌えます」と答えた。2人で初めてのセッションをし、翌週からは岩谷さんもライブハウスのステージに立つようになった。2人は楽屋姫を結成。別のバンドでウッドベースを弾く寺島さんを誘い、3人で活動を始めた。

岩谷さんは地元の民放の番組に取り上げられ、ディレクターが「シンガー英樹」と名付けて放送。その名が定着していった。

◇

楽屋姫の人気が高まったきっかけは、結成10周年のコンサートだった。ファンが実行委員会をつくり、節目の公演をコラーレ大ホールで行った。実行委の声かけで集まつた観客は760人。アマチュアとしては異

翌年の20周年記念ツアーに「スペシャルサンクス」として出演したのが、彦次さん。楽屋姫のオリジナル曲をYouTubeで何度も聴き、本番では松谷さんの癖までコピーして演奏した。「松谷さんがいるのかと思って、ぞくっとした」と岩谷さん。歌詞を間違えるほど驚いた。ツアー後、彦次さんは正式に楽屋姫のメンバーになった。

◇

30周年記念コンサートは、第1部が終わった。ステージに岩谷さんが残り、スポットライトが当たるギターを手にした。松谷さんが愛用していたマーティン「D-28」。岩谷さんが弾き語りを始める。

♪出会った人も 別れた人も あの日うたった 思い出のうた セメて心が晴れるまで セメて涙が乾くまで

松谷さんが亡くなった後、岩谷さんが作



「歳旦祭」西淳子

例の人数だった。

「そこで、かっこつけちゃいましてね」と岩谷さん。経費を除いた60万円余りを黒部市社会福祉協議会に寄付した。それから、ライオンズクラブやロータリークラブから出演の依頼が増えた。

さらに地域のイベント出演も増加。主催する団体の代表者が「フォーク世代」だったためだ。しかも、楽屋姫は自前の音響セットを持参し、司会もできるので、予算的にもリーズナブル。岩谷さんは「かぐや姫は呼べなくとも、楽屋姫は呼べる」とユーモア交じりに説明する。県内のイベントに引っ張りだこになっていった。

結成から19年、松谷さんが亡くなった。音楽を愛したギタリストらしく、病を押し10日前までステージに立ち続け、人生に幕を下ろした。楽屋姫は2人になった。

った「風にふかれて」。歌詞には松谷さんの名前の「晴」を入れた。思い出すのが悲しく、新しいメンバーが入ったこともあって、9年間も封印していた曲だった。

公演は「神田川」など18曲を披露して終了。観客が帰る際は、松谷さんが演奏した曲をBGMで流した。寺島さんは「松谷さんのことは頭から離れることはない。楽屋姫の歴史には彼が入っている」と振り返る。

楽屋姫の3人が来場者を見送る。岩谷さんの横には募金箱。観客たちが義援金を入れていく。

◇

2011年4月、岩谷さんは岩手県釜石市にいた。東日本大震災発生から44日目。富山県内の経営者団体から、被災地でのコンサートを依頼されていた。

岩谷さんの母親は福島県塙町出身。里帰

り出産だったため、福島は岩谷さんの出生地であり、小学校の夏休みを過ごした第二の故郷。東北の被害に心を痛めていた。

港に乗り上げたタンカーがあり、上下が逆さまになった住宅も目に入る。人の気配はない。カモメも飛んでおらず、ネコもいない。津波が全てを奪い去っていた。静けさが怖かった。

岩谷さんは、音楽仲間が主催するチャリティーコンサートには何度も出演してきたが、自分で開いたことはない。「売名行為」と思われることを避けてきた。だが、被災地を目の当たりにし、「何かしなければならない」と思った。

富山に戻って1週間後、個人でチャリティーコンサートを始めた。「副業でもうけている」と思われたくないの、イベントに呼ばれても出演料は募金に回す。24年1月1日に能登半島地震が発生してからは、能登の被災地支援を始めた。

集まった義援金は合わせて1000万円を超えた。岩谷さんが被災地を訪れたのは東北が8回、能登は9回。現地で歌うだけではなく、富山に戻って被災地の現状を伝える。今年の春にも能登を訪れる予定だ。

◇

岩谷さんは信用金庫に勤めながら音楽活動をしている。コンサートは楽屋姫と個人の活動を合わせ年間に100回以上。休日のほとんどを音楽活動に費やすが、「休みにゴルフや草野球する人と一緒で、楽しいことは疲れない」。楽屋姫30周年ツアーの打ち上げで2月に温泉に行き、泊まるホテルでもコンサートをする。

「歌っている自分と、聴いているお客様のちょうど真ん中にある辺りが『音楽』」と岩谷さんは言う。「相対する誰かがいて、初めて音楽は成り立つ」

個人として出演するコンサートでは、かぐや姫だけではなく、客層に合わせて「ふるさと」や「こきりこ節」を歌い、クリスマスシーズンには「あわてんぼうのサンタクロース」をサンタ姿で披露する。観客の期待に応えるため、岩谷さんは歌い続ける。音楽が楽しくて仕方ない。

岩谷さんは、プロのミュージシャンになろうと思ったことはないそう。本人は「人の歌を歌ってるのに、何がプロか?」と笑いますが、観客を喜ばせようとする姿勢に強いプロ意識を感じます。根強いファンがいるのも納得です。

「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時~午後5時)。



心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は2月1日(日)です。

紙面提供／人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局